

今月のメッセージ（2022年1月）

「心に残る二つのこと」

清水教会信徒 石月 中



私が教会に通っていて、「良かったあ！」といつも思っていることが二つあります。

一つ目は、教会は、マリア様を大事にすることです。尊敬していることです。マリア様に祈ることができることです。もう少ししっかり言うなら、マリア様に取り次いでいただいて、神に祈ることができることです。

出口の見えない困難に会ったときやうんと疲れた時に、祈りの言葉を探すことも出来なくても、受胎告知を受けている姿、幼子イエスを抱いている姿、あるいは祝宴のお酒がなくなったことを心配している姿、また、降架されたイエス様を抱き抱えているマリア様の姿などを思い浮かべて、私達はマリア様に向かって言葉にならない祈りをつぶやいていることもあるのではないのでしょうか。

二つ目は、教会音楽が、西洋音楽になくてはならないものになっていることです。西洋音楽のすみずみに染みわたり、屋台骨になっていることです。



まずはグレゴリオ聖歌。高い高い天井に向かってゆらゆらと立ち登る煙のように聖堂に響くグレゴリオ聖歌。約60年前に私は都内の教会で洗礼を受けましたが、その当時は、12月24日深夜のクリスマスのミサは多くの教会でグレゴリオ聖歌が歌われていました。歌詞はラテン語で、大まかにいえば言葉の一音ずつに音を付けて歌われる、不思議な音楽でした。聞くほどに、歌うほどに、深い信仰に導き、永遠へと続く人間存在の本質に近づくような気持ちになりました。グレゴリオ聖歌は、イエス・キリストの誕生から十字架、復活、聖霊降臨までの一生のそれぞれの場面でそれぞれの歌が、世界共通のラテン語で、世界中で、一年を通して歌われていました。しかし20世紀の後半から、ミサの言葉や歌はそれぞれの国や地域の言葉でよいことになり、現在ではほとんどの教会の普通のミサは、始めから終わりまで全部が日本語で行われています。

グレゴリオ聖歌を含めて教会音楽には、教会内に留まらず広く一般に知られている曲があります。まず、「アヴェ・マリア」。グレゴリオ聖歌のほか、バッハ・グノーやシューベルト、モーツァルト、カッチーニ、アルカデルトなどが有名です。ほかに約30人の作曲家が作品を残しているそうです。次に、「レクイエム」。死者のためのミサ曲。グレゴリオ聖歌のほか、モーツァルト（愛好家は「モツレク」とも呼んでいる！）やフォーレが特に有名です。ほかに約50人の作曲家が作品を残しているそうです。



以上、日頃の思いを、自分の言葉で書いてみました。舌足らずのところもたくさんあると思いますが、よろしく願いいたします。